

16. 金工

江戸時代 松江市による近年の調査で、松江城三之丸御殿所用と考えられる「釘隠」が現在も市内の寺院などに多数残されていることが明らかになりました。松江城築城から間もない寛永年間中期（1630年代）に遡るもので、最初の城主・堀尾氏の家紋「六目結紋」があらわれた特徴的なデザインです。精巧な加工が施され、京都の鋳職人に製作させたと考えられます。江戸時代前期の松江ではまだ充分な技術を持った職人が育っていなかったのでしょうか。



六目結紋釘隠
円成寺蔵



谷豊重「赤銅金象嵌雲龍図罽」



春田每幹「鉄地連獅子透罽」
松江歴史館蔵

幕藩体制が安定した江戸時代中期になると、松江では谷・小林的両家が活躍し、特に谷派は松江藩お抱え金工として幕末まで代々優れた刀装具を残しました。分家、別家、支流を含め、松江藩領最大の金工一派であり、中でも二代谷豊重は江戸の名工・尾崎直政門下で技を磨き、谷派の第一人者とされています。

また、元は奈良の甲冑師と伝わる雲州春田派もあります。室町時代に各地に分かれ、江戸時代に罽工に転じたとされます。幕末まで多数の工人がいたようですが、迫力ある作風で元禄期頃に活躍した春田每幹が頂点とされています。

江戸時代後期の金工としては、江戸で鎌田矩寿、土屋安親に学び、帰松して松平家御用をつとめた村田寿親（1830-1895）を初代とする村田家があり、二代利親、三代・四代寿親と昭和期まで続いています。

また、明治時代の彫金の名工・塩津親次（1864-1945）は村田寿親の次男で、父から基礎を学んだ後、東京で加納夏雄・海野勝珉に学んで帰松、各種の博覧会で受賞を重ねました。塩津家二代の正寿は東京美術学校で海野清に師事し、初代と同様に彫金界で活躍しました。

その後 武家社会の中で刀装小道具を製作していた金工たちも、幕藩体制が崩壊した明治維新以降、新しい時代の需要に応じて、煙管や香炉・香合・花瓶などを製作するようになります。

こうした時代の転換点に生まれた野々見良親（1867-1933）は、松江藩お抱え絵師だった陶山勝寂に画技を、彫金を父・盛光に学び、金銀の象嵌も巧みで高い評価を得ました。

そもそも 現在では一口に「金工」と呼びますが、江戸時代以前、刀装具など武具を製作する職人と、鍔金具や装飾品を製作する職人は、家系も身分も明確に区別されていました。後者は「唐金師」「白銀屋」などと呼ばれました。

（村角 紀子）



塩津親次「白銀群蝶香炉」
個人蔵



野々見良親「銀四季草花透鈎香炉」
個人蔵

【参考文献】

- ・『島根の工芸』島根県立博物館、1987年
- ・『雲州松江の歴史をひもとく—松江歴史館展示ガイド』2017年改訂版
- ・出雲文化伝承館編刊『出雲の漆と金工の世界』展図録、2022年
- ・久保智康「伝松江城三之丸御殿所用の横長蓋形六目結紋釘隠について」『松江城研究』5号、2024年